

河野哲也 著、はまのゆか、
こばようこ 絵

『対話ではじめる
こどもの哲学（全4巻）』

童心社、2019 年
9,900 円（税別）

本書は、小中学校の道徳科（「特別の教科 道徳」）の授業の中で使用することを念頭に置いて作成された、哲学対話（子どもの哲学）のための教材である。全4巻から成り、第1巻には「自分のぎもん」、第2巻には「家族・友だちのぎもん」、第3巻には「社会のぎもん」、第4巻には「命・自然のぎもん」という副題が付けられている。これは、学習指導要領が定める道徳科の内容項目の「4つの視点」に対応するものであり、本書は小中学校の道徳科が扱う内容の一定程度（7割くらい）をカバーするように作られている。

本書の具体的な中身は、小学校中学年生でも一人で読むことのできる道徳的なテーマに関する読み物集である。各巻それぞれ5つのテーマについて、小学5年生の男の子や女の子が、人間の言葉をしゃべるネコやイヌたちと哲学対話をしている。どの対話も結論が出ないまま「途中で」終わっており、本文を読んだ子どもたちが自ずと一人で続きを考えたり、教師や友達と話をしたくなったりするように作られている。また、対話を深めるためのコツをまとめた「たいわーど」は、読者の子どもたちだけでなく、教室で哲学対話を行いたい

がどのように進めていけばよいか自信が持てない教師にとっても、わかりやすい道標となっている。

子どもと一緒に哲学対話を行うための教材は、これまで日本でも出版されてこなかったわけではない。しかし本書は、学校の中で、とりわけ道徳科の授業において哲学対話を行うことを強く意識して作られた教材であり、この点が類書にはない本書最大の特徴である。しかし、そもそもなぜ、小中学校の道徳科の授業の中で哲学対話を行うべきなのだろうか。

この疑問の答えは、本書第3巻の一連のコラムの中で示されている。その要点を一言でまとめると、哲学対話を行うことそれ自体が、道徳的にいい社会を成立させるための条件であるから、というものである。本書によれば、「道徳的にいい社会」とは、「みんなが自分のことを話すことができ、それを聞いてあげるだれかがいて、こまりごとをいっしょに考えてあげて、ほかの人たちはそれを応援してあげられるような社会」（本書第3巻、50頁）である。これはまさに、みな哲学対話に参加することで作り出される「探究の共同体」にほかならない。このため、道徳科の授業の中で哲学対話を繰り返し行い、「相手の話を聞く」「自分の言葉で話す」「みんなで一緒に考える」ための方法や態度を体験を通して学ぶことは、子どもたちが「道徳的にいい社会」の作り方を学ぶことに等しいのである。それゆえ、道徳教育は哲学対話を軸として編成されるべきである。――以上が、本書の主張である。

このように整理すると、本書は、道徳的な共同体の形成の仕方を学ぶことを道徳教育の目的と考える「共同体」モデルを採用しており、その立場から道徳科の授業への哲学対話の導入を推進して

いることがわかる。しかし一方で、日本の学習指導要領は、道徳教育の目的をより「個人主義」的な次元で捉えているのではないだろうか。学習指導要領によると、道徳科の目標は「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養う」ことであり、それはすなわち、「道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」ことであると説明されている（「小学校学習指導要領」第3章「特別の教科 道徳」・第1「目標」）。道徳科がこうした個人の道徳的資質や心情を育成することも教育目標に掲げているのであれば、道徳科の中に哲学対話を取り入れること自体は推奨されるべきだとしても、たとえば哲学対話とそれ以外の道徳科の学習のバランスをどのように取っていくべきかといったことなどは、重要な問題として残るだろう。

本書は一方では、現行の日本の道徳教育のあり方や仕組みを受け入れた上で、その形式に則る形で道徳科の中に哲学対話を導入しようと試みている。しかし、「哲学対話を軸とした道徳教育」というものを本気で構想するならば、そもそも道徳教育の目標をどこに設定するかということも含めて、現行の日本の道徳教育のあり方自体を根本から問い直さざるをえないだろう。この点に関して、本書が「旗幟」をもう少し鮮明に示してくれていたなら、本書を道徳科の教材として使用しようと考えた教師や学校も、道徳の授業の中で哲学対話をどのようなものとして位置づけ、どのように活用していくのかについて、より具体的に見通しを立てやすかったのではないかと評者は考える。

土屋陽介（開智国際大学）